

第2集刊行に寄せて

看護学科主任 石橋 カズヨ

「活水論文集—看護学部編」第1集を発刊した2013年3月、看護学部看護学科は、第1期卒業生を輩出すると同時に完成年度を迎えました。この間、高等教育を担う一員となった看護学科教員は、看護学教育・研究の質を確保することを目的とした研究助成を豊富に受けており、研究活動に取り組む機会に恵まれてきたといえるでしょう。しかしながら、論文化し評価を受けられる紀要体系が整ったのは2012年度第1集からであり、論文の蓄積は課題でもありました。そのような中、「活水論文集—看護学部編」第2集を刊行する運びとなったことに感謝いたします。

看護学部は、2012年度に活水女子大学倫理委員会の下部委員会として「看護学部倫理委員会」を設置し、第1回生の卒業研究支援を開始すると同時に教員の研究倫理申請にも門戸を開きました。審査は類を見ない厳しさと評されつつも、2012年度59件、2013年度は64件に及んでいます。このような教員の取り組みは、研究の対象となる個人・集団の人権を尊重する意味、手続き、倫理的配慮等について、身をもって学ぶ研究者としての姿勢を学生と共有する機会でもあります。

「想定する未来に辿り着くには、すでに敷かれた道を猛進することではなく、学びながら進むこと」これは11月29日NHK教育で放映された「ハーバード白熱教室」での、リーダーシップは変革の痛みを伴うという議論の一説です。直面する問題に取り組む場合、現実をみながら未来に持っていく価値観と捨ててほしい価値観の内部矛盾を区別することを学んでいる、そのことを理解して潜在的能力を生み出すことが大切だというわけです。

看護学や医療に関する研究は、現実的な看護に関する様々な問題に直面し、看護するという本質と照らして矛盾する価値観を判別する過程でもあり、常に分析的な視点を養い、その成果は社会的要請に応えるものでもあります。教育者であると同時に研究者でもある教員は、卒業への道を敷くだけでなく、学生が卒業後に従事する保健医療現場に求められている変革に対応し、卒業後の長い職業生活において生涯にわたって研鑽し行動できるよう、様々な価値観の内部矛盾を探究する「看護研究」という足跡を通して学生の潜在的能力を刺激したいものです。本書が多く
の学生並びに先生方の目に触れ、ご感想ご意見をお寄せいただくことによって第3集への布石となるよう祈念いたします。